



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3473 号 2017.1.21 発行

文楽、伊勢神宮に奉納 3月、日本初「バリアフリー」 中日新聞 2017年1月21日
伊勢神宮での文楽の公演を発表する中村さん（左）ら＝伊勢市役所で



国連教育科学文化機関（ユネスコ）の無形文化遺産に指定されている人形芝居「文楽」が三月十一～十四日、伊勢市の伊勢神宮外宮で上演される。障害者が楽しめるよう工夫された日本初の「バリアフリー文楽」。人形遣いの桐竹勘十郎さん（63）ら大阪を拠点とするプロが出演する。

財団法人「日本財団」（東京）が二〇一五年に始めた「につぼん文楽プロジェクト」の一環。世

界に誇る古典芸能を鑑賞してもらおうと、組み立て舞台を運び込み、東京の六本木ヒルズや大阪の難波宮で上演してきた。伊勢は第四弾で、中部地方では初めて。

演目は、五穀豊穡などを祝う人形の舞を見せる「二人三番叟（さんばそう）」と、逃亡する源義経や忠臣の佐藤忠信に化けたキツネが登場する「義経千本桜 道行初音旅（みちゆきはつねのたび）」の二つ。

公演の発表会見が十七日、伊勢市役所であった。総合プロデューサーを務める横浜能楽堂館長の中村雅之さん（57）＝中日新聞夕刊で「歌い踊る切手」を連載中＝は「日本文化の原点とも言える伊勢での上演は、伝統の継承という点でも意義深い」と話した。

バリアフリー文楽の取り組みでは、耳の聞こえない聴覚障害者には解説文を読む機器を、目の見えない視覚障害者には音声ガイド機器を貸し出す。横浜で「バリアフリー能」に取り組む中村さんは「出入り自由なので知的障害や精神障害のある方も来てほしい」と話している。

神宮への奉納舞台のため鑑賞は無料。事前の申し込みが必要。十一、十二の両日は午後一時と四時半から、十三、十四の両日は午後一時と六時半からの計八回を予定。（問）につぼん文楽プロジェクト＝03（6233）8948 （大島康介）

障害者目線で使い勝手点検 関空の新ターミナルビル 産経新聞 2017年1月20日
間もなく開業する関西空港第2ターミナルビル内を、車いすに乗り見て回る大久保健一さん＝20日午後



間もなく開業する関西空港第2ターミナルビル（国際線）で20日、車いすの男性や聴覚障害がある女性らが建物内を見て回り、トイレやチェックインカウンターなどが障害のある人にも使いやすいか点検した。

運営する関西エアポート側が、出国審査場や搭乗ゲートなどを約2時間かけて案内。脳性まひで車いすの大久

保健一さん（40）＝兵庫県西宮市＝は「エレベーターが少し狭かったのが残念」と感想を述べた。難聴の山岸かな子さん（41）＝同市＝は「館内放送を知らせる電光掲示板があればありがたい」と注文した。

関西エアポートの担当者は「さまざまな意見を頂いた。改善できるところはしていきたい」と話した。新ターミナルビルは、格安航空会社(LCC)専用として28日に開業する。

三笠産業、障害者ケアに参入 光で五感刺激 自社技術活用

日本経済新聞 2017年1月21日

農業資材やトナー製造を手掛ける三笠産業（山口市）は知的障害者・認知症患者ケア事業に参入する。「スヌーズレン」というオランダ発祥の、五感に訴えて障害者の情緒を落ち着かせたり活性化したりする教育・治療手法を活用する。自社技術で関連製品を製品化し、東京・銀座と山口市にショールームを開設した。全国の福祉施設や支援学校向けに販売する。

プローバ 障害者に遊技機体験の場

Sankeibiz 2017年1月21日

「障がい者ふれあいフェスティバル」には約100人が参加し、4種類の遊びを満喫した

広島県を中心にパチンコホールやレジャー施設などを運営するプローブグループ（広島市安佐南区）は昨年12月20日、広島市安佐南区の複合レジャー施設フィエラ・ディ・プローブで「障がい者ふれあいフェスティバル 2016」を開催した。スポーツ振興や障害者支援、地域環境保全などを手掛ける特定非営利活動法人フォルツァプローブ（同）の取り組みの一環。



同フェスティバルは、普段、パチンコ・パチスロなどの遊技機やゲーム機などに触れる機会の少ない障害を持つ人々に、さまざまな遊びを通じて笑顔になってもらいたいとの思いでスタート。全日本アミューズメント施設営業者協会連合会広島県本部協力のもと、1996年から毎年この時期に実施されている。

当日は、県内にある共同作業所全国連絡会広島県支部傘下の5つの作業所から約100人（引率者含む）が参加。あいさつに立ったフォルツァプローブの鈴木貴裕理事長は、地元の球団・広島カープやサッカーチーム・サンフレッチェ広島の活躍に触れつつ「スポーツは見るのも楽しいが、自身で体を動かすことでより楽しむことができる」と提言。「本日は皆さんにパチンコやボウリング、カラオケなどを通じて、しっかりと体を動かしていただき、スポーツ同様に楽しんでもらいたい」と語った。

オープニングセレモニー終了後、参加者は3チームに分かれ、4つの施設を巡回しながら、それぞれの遊びを満喫。パチンコでは、初めて遊技する人が大勢いるなか、ギミックの動きや映像に興味津々。終了後には「まだ遊技したい」「ドキドキワクワクした」などの声が聞かれた。

一方、広島県内のパチンコホールで構成する広島県遊技業協同組合（理事長・延川章喜氏）傘下の広島市遊技業防犯協会広島南支部（支部長・野田啓之氏）は同月、広島市南区にある児童養護施設「似島学園」にクリスマスプレゼントとしてリュックサック21個を寄贈。これを受けて12月9日には学園から礼状と感謝状が贈られた。同支部では約20年前から10年間、似島学園に対してクリスマスケーキを届けてきたが、2004年からは施設側の希望にあわせてプレゼントを寄贈。ビデオデッキやステンレスボトル、バレ

ーホールなど毎年贈り続けており、今後も継続して活動を行う意向にある。

パチンコホールは人々の生活に寄り添う大衆娯楽であり、地域密着型のサービス業。このような取り組みが全国各地で展開されるなか、地域コミュニティを支える柱の一つとして機能し続けることが期待される。

卒論 展示会始まる 「被災者と心を通わす」

東京新聞 2017年1月21日



展示されている卒業論文を紹介する専修大学の学生ら＝多摩区で

専修大学の人間科学部社会学科・大矢根淳ゼミナール（災害社会学）の卒業論文展示会が十九日、川崎市多摩区の同大学サテライトキャンパスで始まった。卒論展の副題は「被災者と心を通わす専大生」だが、震災にこだわらず、各自が身近なテーマに取り組み、社会的弱者に寄り添う力作がそろった。（山本哲正）

出展したのは同ゼミの十二人。初日に会場案内をした相模原市の須賀一樹さん（22）は、三年生の時に飼い犬を亡くしたといい、そうした飼い主が深く落ち込む「ペットロス」に着目。近くの清川村に、東日本大震災で被災して行き場を失った犬猫等の保護活動をする一般社団法人「清川しっぽ村」を訪ねるなどし、ペットを死なせない活動がペットロスを防いでいることを示した。

埼玉県三郷市の藤井拓朗さん（22）は、同市の「みさと団地」でNPO法人が映画鑑賞会などを開いて住民の緩やかなつながりをつくり、孤独死を防いでいる取り組みを調べた。

このほか、知的障害者の活動支援センターでボランティア活動をしている学生はセンターの事業活動をまとめた。また、自らも母子家庭に育った学生は、母子世帯の貧困問題について調べた。

主に災害について考える大矢根ゼミの卒論展は、東日本大震災を受けて二〇一二年に始まり、今年で六回目。一般向けの展示は、同大でも珍しい。

展示会は二十三日までの午前十時から午後七時。サテライトキャンパスは、小田急線向ヶ丘遊園駅北口のアトラスタワー向ヶ丘遊園二階。入場無料。問い合わせは、サテライトキャンパス＝電044（922）0992＝へ。

データ35件が消失 熊本市役所火災【熊本県】

西日本新聞 2017年01月21日



火災が起きた熊本市役所10階で、焼けた資料などを片付ける熊本市職員たち＝昨年12月19日午前

熊本市は20日、昨年12月18日に市役所10階の健康福祉政策課の書類やパソコンなどフロアの4分の1に当たる約300平方メートルを焼いた火災で、同課が管理する災害時要援護者避難支援制度への登録申請書など、少なくとも計35件のデータが復元できず、失われたと発表した。

支援制度は、市が災害時に助けが必要な高齢者や障害者などを把握し、地域の自治会や民生委員などと情報を共有する狙いがある。同課によると、昨年9月以降に受け付けた申請書は約40件だったが、各区役所に出されて写しが残っていた13件以外は書類が焼け、市役所内のシステムにもデータが残っていなかった。

また、熊本地震で倒壊した市営墓地の墓石に関する相談記録

のうち、昨年1月以降に受け付けた5件ほどが焼けたとしている。市は2月末に配布される市政だより3月号で再申請を呼び掛ける。10階の復旧時期は、3月中を目指すとしている。

栃木) あの素晴らしい授業をもう一度 北山修さんが講義 佐藤太郎



朝日新聞 2017年1月21日
約20年勤めた九州大学の創立五十周年記念講堂の前に座る北山さん＝2013年12月、福岡市東区

白鷗大学(小山市)の北山修副学長(70)が3月31日付で同大を定年退職するのに伴い、2月4日に記念の特別講座が同大で開かれる。北山さんの最後の講義で、一般にも公開される。作詞家きたやまおさむとしてのミニコンサートも用意されており、懐かしの名曲が披露される。

「北山修副学長退職記念特別公開講座」で午後2時半から4時半まで。はじめに北山さんが「(名前のないアート)について」と題して基調講演。同大によると「障害者がつくるアートについて語る」という。その後、同大の教授を交えて対談する。司会を務める伊東孝郎教授は「北山先生は副学長という役職とは関係なく、毎週水曜日に新幹線で来ては精神分析の基礎を学生に説き続けた。最後の対談も、心理学とアートの接点を北山先生がどう切り結んでいくか非常に濃密な内容になると思う」と話す。

対談後、作詞家きたやまおさむとしてのミニコンサートが開かれる。進行役は「岬めぐり」「走れコウタロー」で知られるフォークシンガーで、同大教育学部教授の山本コウタローさんが務める。北山さん作詞の「あの素晴らしい愛をもう一度」などの名曲メドレーで北山さんの最後の講義を締めくくる。

介護現場での実習体験披露 豊橋創造大がケアスタディ発表会



東日新聞 2017年01月21日
実習の経験を発表する学生(豊橋創造大学で)

豊橋創造大学は20日、老人施設などで実習を行った学生による「ケアスタディ発表会」を行った。専攻科福祉専攻の学生7人が、高齢者や障害者の介護実習についての経験を発表。介護や支援の在り方などについて語り、体験を進路先で糧とする意識を高めた。

学生7人は、昨年秋に特別養護老人施設や障害者支援施設などで約5週間の実習を実施。各施設で1人の利用者を受け持ち、自身で考えた計画に沿った介護に励んだ。

この日は、各学生が「認知症ケアのありかた」や「信頼関係を築く」などをテーマに実習の経験を発表。「関わり方ひとつで利用者に変化していく」や「精神的な支援が大切だと感じた」などの感想を述べた。

福祉専攻の学生は、2年間の課程で保育士の資格を取得。その後、介護について1年間学んで介護福祉士の資格も得る。大学では、介護の専門知識に加え、人としての倫理観や尊厳に重きを置いた講義を受講。この日の発表会では、利用者同士の間人関係を円滑にする支援や、介護士の使命感などについて思いを語った。

大半の学生は、4月から民間の介護施設への就職が決まっている。発表会には、実習先の指導者や就職先の担当者などが参加。人材不足の介護業界で、貴重な戦力となる若者の意見や取り組みに耳を傾けた。

大林博美専攻科長は「福祉の根源である、人を尊厳する価値観を持ち、現場で実践してほしい」と期待を寄せる。

東京五輪・パラ 千葉県に担当部長設置

産経新聞 2017年1月21日

県は、平成29年度の組織改編（4月1日付）で、総合企画部内に2020年東京五輪・パラリンピック担当部長のポストを新設すると発表した。県内で行われる8競技の具体的な会場整備や、大会組織委員会などとの協議の総括責任者として業務にあたる。

東京オリンピック・パラリンピック推進課も体制を強化し、課内の戦略推進班を「開催準備室」として、人員を現状の6人から12人程度に増やす。国際スポーツ誘致班も「事前キャンプ・競技普及班」に改める。

また、成田空港の機能強化に向け、空港周辺地域の社会基盤整備など重点的に取り組むため、空港地域振興課内に「空港地域整備・広域活性化班」を新設することも決めた。

福祉関係では、所管業務が多岐にわたる障害福祉課（62人体制）を分割し、障害福祉施策の推進を担当する「障害福祉推進課」（約40人体制）と障害者福祉支援施設などのサービスの充実を支援する「障害福祉事業課」（約30人体制）をつくる。児童相談所の体制強化のため、児童福祉司や児童心理士などを5年間で約200人増やす方針。

障害ある子の学校生活支援 中小企業でつくる「プラザ大分」

大分合同新聞 2017年1月21日

大分支援学校にオムツ交換用台車を運び入れる県技術・市場交流プラザ大分の会員



県内の中小企業でつくる「県技術・市場交流プラザ大分」（池辺浩隆代表幹事、21社）は障害のある子どもたちの生活に役立ててもらうため、これまでより簡単におむつ交換ができる「オムツ交換用台車」の開発を進めている。試作品を大分市の大分支援学校（田中淳子校長）で使ってもらい、現場の声を取り入れながら実用化に向けた改良を重ねている。

プラザ大分は1982年から、県の支援を受け、教育機関などと連携しながら企業が単独では困難な新技術の開発などを目指して活動している。同校に会員企業の経営者の子どもが通学していることから、「学校生活の中で感じる“困り”を技術の力で解消したい」と申し出た。教職員の意見を参考に、車いす使用時や重複障害の児童・生徒のおむつ交換がスムーズにできる装置の開発を始めた。

2014年から会員同士でアイデアを出し合い、これまでに3台を試作した。最新の試作品は、ステンレス製で高さ1・2メートル、長さ1・6メートル、重さ120キロ。車いすに座った状態で電動昇降式の胸当てやアームに上半身を預けて立ち上がり、おむつを交換する。おむつ交換には通常、2人の介助者が必要だが、台車を使えば介助者が一人でも作業可能。目隠し用のカーテン、移動用キャスターも取り付けられた。

同校では自分でおむつ交換が難しい児童、生徒約10人が試用する。田中校長は「地元企業の取り組みは大変ありがたい。子どもたちの学校生活が少しでも楽になれば」と願う。

池辺代表幹事は「改善点を踏まえ、より便利で安心できる福祉機器を完成させ、子どもたちに届けたい」と話している。

矢掛・YKG60に総務省表彰 「ふるさとづくり大賞」 山陽新聞 2017年01月20日

地域をより良くしようと活躍する団体・個人に贈られる総務省の本年度「ふるさとづく

り大賞」で、矢掛町の小中高生らでつくる地域活動グループ「YKG60」が団体表彰に輝いた。今回は岡山県内唯一の受賞。同省が20日、発表した。

地元の「干柿まつり」でカフェを運営し、利用客をもてなすYKGメンバー＝2016年12月18日、矢掛町小田



YKG60は町合併60周年の2014年に発足し、現在メンバーは約100人。子どもたちが主体となり、ごみ問題の啓発や地元イベントでのカフェ運営、発達障害のある子どもと保護者の交流会などに取り組んできた。地域の課題解決を探る活動が郷土愛を育み、地域を担う自覚を促している点などが高く評価された。2月4日に東京で表彰式がある。

井辻美緒共同代表は「活動を通じ、子どもたちの自主性が大きく伸びたことに驚かされている。郷土愛が地域の力になると信じ、活動を続けていきたい」と話している。

同大賞は1983年度に「地域づくり総務大臣表彰」として創設され、2014年度に改称した。

ご当地ヒーロー「安芸戦士メープルカイザー」 児童虐待防止の活動報告



産経新聞 2017年1月21日
特製オレンジリボンプレートを手渡す安芸戦士メープルカイザー＝広島県庁

児童虐待防止の啓発活動に取り組んでいる広島のご当地ヒーロー「安芸戦士メープルカイザー」が20日、広島県内23市町の担当者たちを激励する「オレンジリボン・キャラバン」を終えて、県庁で活動報告をした。

キャラバンは、昨年11月にスタート。メープルカイザーが全23市町の児童虐待防止に関わる担当者などを訪問し取り組みの大切さを訴えるなどして激励し、児童虐待防止のシンボルマークの特製「オレンジリボンプレート」を贈呈。一部の市町では保育園で子供たちと親交を深めたりした。

この日、県庁に菊間秀樹・県健康福祉局長を訪ねたメープルカイザーは「いろんな市町の取り組みが知れて勉強になった。市民町民に伝えていけるような活動もしていきたい」と報告。菊間局長は「子育てにしんどい思いをしている人たちを早く見つけて手助けできるようにさまざまな手立てを行ってほしい」と話した。

0歳児ママに息抜きを 静岡市のケアサービスが人気 民間宿泊施設を休憩や相談の場に

産経新聞 2017年1月21日

民間宿泊施設を活用し、0歳児の母親に休息や育児相談の場を提供する静岡市の「ママケアデイサービス」が人気だ。昨年8月末のスタートから今月20日までの5カ月間に109組の親子が利用。反応の良さに市の担当者は「思っていたより需要が多い」と手応えを口にしていく。

サービスを受けられるのは、市内に住む生後4カ月から1歳未満の子供と、その母親。利用するお母さんは市内にある旅館や温泉施設で保育士や保健師らに子供をあやしてもらっている間に、温泉に入ったり、お昼寝をするなどの“息抜き”をすることができる。

子供の世話には、市が実施している「子育てサポーター養成講座」を受講した“先輩ママ”たちも参加。子供を預けるお母さんは施設滞在中に先輩ママや保育士らから、子育てについてのアドバイスを受けることもできる。

同市によると、子育て中の母親に相談や息抜きのできる“居場所”を提供する試みは県

内初で、利用したお母さんたちからは「子育ての悩みをほかのママや先輩ママたちに相談できる上に、自分の時間が持ててリフレッシュになる」と好評だという。

平成27年9月に市内で開かれた「市長とお茶カフェ&ランチトーク」の場で、市内の子育てサークルのメンバーから「育児を毎日しているお母さんを癒やせる場所を市内につくれないか」という提案が出されたことが、事業を始めるきっかけとなった。

市子ども家庭課の担当者は「母親が家庭や地域から孤立するのを防ぐ一助にしたい」とした上で、「出産後の支援を手厚くすることで、もう1人産もうという意識にもつながってくれば」と話す。児童虐待により命を落とす子供の6割が0歳児という統計もあるといい、こうした不幸な事案を減らすことへの期待も込められている。

ママケアデイサービスへの参加には事前予約が必要。もくせい会館（葵区）▽静岡ホテル時之栖（駿河区）▽十枚荘（同）▽駿河健康ランド（清水区）－でそれぞれ週1回実施している。

開催時間は午前10時～午後3時で、参加費は1500円（昼食代や入浴代は別途必要）。未就園のきょうだいを同伴する場合に限り、0歳児と一緒に預かってもらえる。

申し込み、問い合わせは静岡市母子寡婦福祉会（電）054・221・1565。

発達障害、初診待ち最長10カ月 総務省が改善勧告 四倉幹木

朝日新聞 2017年1月21日

総務省行政評価局が、発達障害のある子どもの診断をしている医療機関の受診状況を調べた結果、半数以上の機関で初診までに3カ月以上待たされていることがわかった。中には約10カ月以上待たされる機関もあった。総務省は20日、厚生労働省に改善を勧告した。

行政評価局は昨年8～11月、子どもの自閉症やアスペルガー症候群、注意欠陥・多動性障害（ADHD）、学習障害（LD）などの発達障害を診断できる医師がいる全国約1300の医療機関のうち、主要な27機関について調べた。

その結果、高校生以下の受診者が初診を受けるまでにかかる期間は、1カ月以上3カ月未満が6機関、3カ月以上半年未満が12機関、半年以上が2機関あり、そのうち1機関では約10カ月かかっていた。

初診を待つ子どもの数は10～49人が9機関、50～99人が4機関、100人以上が8機関だった。

高市総務大臣閣議後記者会見の概要

総務省 平成29年1月20日

【発達障害者支援に関する行政評価・監視】

本日の閣議におきまして、私から文部科学大臣及び厚生労働大臣に対しまして、「発達障害者支援に関する行政評価・監視」の結果に基づく勧告を行う旨、発言いたしました。

本勧告におきましては、発達障害者に対し、各ライフステージを通じた切れ目のない支援の充実を図る観点から、

- (1) 発達障害が疑われる児童の早期発見に資する有効な措置を講ずること、
 - (2) 適切な支援と情報の引き継ぎ、
 - (3) 専門的医療機関の確保のための一層の取組
- などを求めています。

この勧告を着実に実行し、関係者による支援の充実を図っていただきたいと思います。

詳細は、行政評価局評価監視官に御確認をお願いいたします。 （以下省略）

「気は優しくて力持ちの文科省に」次官、全職員へメール 朝日新聞 2017年1月20日
文部科学省の前川喜平事務次官が全職員にあてて送った「文部科学省の皆さんへ」と題するメールの主な内容は以下の通り。

本日、私は大臣から辞職を承認する辞令を頂戴しました。

文部科学省の皆さんが元気いっぱい仕事に打ち込めるようリードすべき立場の私が、このような形で退職することは、誠に残念であり申し訳なく思っています。

国家公務員法が定める再就職規制を遵守（じゅんしゅ）できなかつたことは事実であり、文部科学省として深く反省し、しっかりと再発防止措置をとる必要があります。

私を反面教師として、二度とこのようなことが起こらないよう、職員の皆さんは遵法意識を徹底し国民の信頼回復に努めてください。

しかし皆さん、動揺したり意気消沈したりしている暇はありません。

一日たりともおろそかにできない大事な仕事があるからです。

文部科学省の任務は極めて重要です。私が考える文部科学省の任務とは、教育・文化・スポーツ・科学技術・学術の振興を通じて、誰もが明るく楽しくしあわせに人生を全うできる社会をつくること、未知なるものに挑戦し限界を克服し輝く未来へと前進すること、さらには自由で平等で平和で民主的で文化的な国をつくり世界の平和と人類の福祉に貢献することです。

そして、私が考える文部科学省職員の仕事は、子どもたち、教師、研究者、技術者、芸術家、アスリートなど、それぞれの現場でがんばっている人たちを助け、励まし、支えていくことです。

特に、弱い立場、つらい境遇にある人たちに手を差し伸べることは、行政官の第一の使命だと思います。

その意味でも、文部科学省での最後の日々において、給付型奨学金制度の実現の見通しがついたこと、発達障害や外国人の児童生徒のための教職員定数改善に道筋がついたこと、教育機会確保法が成立し不登校児童生徒の学校外での学習の支援や義務教育未修了者・中学校形式卒業生などのための就学機会の整備が本格的に始まることは、私にとって大きな喜びです。

一方で、もんじゅの廃炉と今後の高速炉開発に向けた取り組み、文化庁の機能強化と京都への移転、高大接続改革の円滑な実施など、数々の困難な課題を残して去ることはとても心残りです。

あとは皆さんで力を合わせてがんばってください。

そして皆さん、仕事を通じて自分自身を生かしてください。職場を自己実現の場としてください。初代文部大臣森有礼の「自警」の表現を借りて言うなら「いよいよ謀りいよいよ進めついにもってその職に生きるの精神覚悟あるを要す」です。

森有礼は「その職に死するの精神覚悟」と言ったのですが、死んでしまっただけではいけません。人を生かし、自分を生かし、みんなが生き生きと働く職場をつくってってください。

ひとつお願いがあります。私たちの職場にも少なからずいるであろうLGBTの当事者、セクシュアル・マイノリティの人たちへの理解と支援です。無理解や偏見にさらされているLGBT当事者の方々の息苦しさを、少しでも和らげられるよう願っています。

そして、セクシュアル・マイノリティに限らず、様々なタイプの少数者の尊厳が重んじられ、多様性が尊重される社会を目指してほしいと思います。

気は優しくて力持ち、そんな文部科学省をつくってってください。

いろいろ書いているうちに長くなってしまいました。最後まで読んでくれてありがとう。

それでは皆さんさようなら。

2017年1月20日 前川喜平

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も



大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行